

堀辰雄「かげろふの日記」小論

鈴木裕子

はじめに

堀辰雄の最初の歴史小説である「かげろふの日記」（『改造』昭和十二年十二月号）は、王朝日記文学である『蜻蛉日記』上巻と中巻を素材としている。『蜻蛉日記』下巻をもとに創作された「ほととぎす」は、『文藝春秋』昭和十四年二月号に掲載され、同年六月、この二作に「序」と「あとがき」を加えて、単行本『かげろふの日記』が創元社から刊行された。

堀といえば、西欧文学に精通した作家というイメージが強いが、「かげろふの日記」「ほととぎす」「姥捨」「曠野」など、王朝文学をもとにした作品も少なくない。堀は数ある王朝文学の中でなぜ『蜻蛉日記』を作品の素材として最初に選んだのだろうか。また、王朝日記文学をどのように小説化したのだろうか。

本研究では、まず『蜻蛉日記』が素材として最初に選ばれた事情をたどり、次に『蜻蛉日記』と読み比べて、「かげろふの日記」で堀が描こうとした作品世界について考察する。テキストは、『堀辰雄全集』全十巻（角川書店、昭和三十八年）、『土佐日記・蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集13、小学館、平成七年十月）を用いることにする。

1 堀が『蜻蛉日記』を選択した事情

本章では、堀の『蜻蛉日記』選択の理由について検証する。堀が『蜻蛉日記』を入手した時期を、池内は「昭和九年夏頃」と推測する（1）。それは、『蜻蛉日記』未だ送らなかつたら送るに及ばず。丸岡君の方から来たから」という立原道造に宛てた書簡（昭和九年八月二十三日付け）が根拠となっている。

昭和十一年「問に答へて」（『文藝懇話会』五月号）の中で、堀は「影響を受けたやうなものはまだ日本の古典の中にはありません」とする一方で、「ラジイゲが『舞踏会』をマダム・ド・ラファイエットの『クレエヴ公夫人』の影響下に書いたやうに、僕も古雅な味はひのある小説を書いてみたい」と述べている。そして、『源氏物語』などが「すらすら読めるやうになつたら、或ひは大いに僕など影響を受けるやうになるかも知れません」と、歴史小説への意欲を見せている。「かげろふの日記」の執筆がこのエッセイの翌年であることを考えると、堀の王朝文学を素材とする作品創作への準備は着々と進行していたと思われる。では、堀を王朝文学に導いたものはなんだったのだろうか。

それは、執筆活動の行き詰まりに関係すると思われる。昭和

十一年十二月から発表が始まった『風立ちぬ』は、前年に亡くなった婚約者との愛とその死を描き、「序曲」「春」「風立ちぬ」「冬」「死のかげの谷」の五章から成っている。「序曲」「風立ちぬ」(ともに『改造』昭和十一年十二月号)、次いで「冬」(『文藝春秋』昭和十二年一月号)と「婚約」(のち「春」に改名『新女苑』同年四月号)が相次いで発表され、同年六月にはそれらをまとめた単行本『風立ちぬ』(新潮社『新選純文学叢書』)が刊行される。しかし、この単行本『風立ちぬ』には、終章「死のかげの谷」は含まれていない。堀は終章の執筆に苦しんでいた。そこから脱出するために王朝文学受容が必要だったのではないだろうか。

その根拠を、当時の堀の創作状況を記した『風立ちぬ』あとがき(『堀辰雄作品集第三』角川書店、昭和二十一年十一月)に見ることができる。

不毛な一年の後、一九三六年の夏、信濃追分に仕事をしにいった私が、そこでまづ考えたものは、やはり「物語の女」の続編を書くことであつた。が、このときも構想なかにして止んだ。さうして秋になつてから引きつづき「冬」を書いた。さうしてさらに、その最後の章として一篇の Requiem を書きたいとおもつて、その儘、山のなかで冬を越したが、その冬はただ「雉子日記」など小品を得たのみであつた。

「不毛な一年」とは婚約者を失った昭和十年であり、この年、堀は小説を書けなかった。年譜によると、翌一九三六年(昭和十一年)の夏、堀は信濃追分に滞在し、「物語の女」(『文藝春秋』

昭和九年十月号)の続編執筆を試みるが書けず、「急に思い立つて」(角川書店版作品集『風立ちぬ』あとがき)『風立ちぬ』を書き始める。そして、「その最後の章として一篇の Requiem を書きたい」と考えるが、これもこの年には完成しなかった。この「一篇の Requiem」が、後に完成する『風立ちぬ』終章「死のかげの谷」である。『風立ちぬ』あとがきは、こう続く。

さうして翌年の春になり、それまで張りつめてゐた自分の氣もちが急に弛むと、私は何かいひしれぬ空虚な氣もちに襲はれ、それから脱れるために、ひたすら心を日本の古い美しさに向けた。さうしておもに王朝文学に親しんだ。六月には、生まれてはじめて京都へも往つて、その古い寺の一室でひと月ばかり暮らしたりした。

「翌年の春」つまり昭和十二年、空虚な氣もちに襲われ、創作活動にも行き詰っていた堀は、王朝文学に親しむとともに、舞台となった京都にも初めて赴き、「日本の古い美しさ」に救いを求めようとした。そこから創作エネルギーを吸収すること、「いひしれぬ空虚な氣もち」から脱出しようとしたのである。また、小谷恒を介して折口信夫に会つたのもこのころである。小谷は、堀が『蜻蛉日記』について、「折口さんの考えはどうだろうか。」(2)と込み入った質問をしてきたと述べている。小谷は堀から『宇津保物語』や『落窪物語』について折口の話を知りたいと言われ、国学院で折口が行つていた後期王朝(平安朝)文学史の講義に堀を案内している。翌十三年の冬には、堀は慶応大学で行われていた折口の「源氏物語全講義」にも通つたと小谷は回想している。このように旺盛な王朝文学摂取を背

景に、『かげろふの日記』は執筆されたのである。

では、『蜻蛉日記』が小説の素材として最初に選ばれたのはなぜだろうか。次の三つの理由を検討してみたい。

一つは、堀が昔から読んでいた西欧文学に登場する女性たちと同じ資質を日本の王朝文学の中の女たちにも認めたからではないかと考えられる。その根拠を昭和十二年の書簡の中に見ることができる。

(八月三十日付け佐藤恒子宛)

僕はこんどは日本の古い女の生涯が書いて見たい 蜻蛉日記だとか更級日記だとかいくつもいい日記を残しているてくれた古い女たち——そんな女たちの一人を僕の物語のなかに引き入れて度ましく生かしてやりたいのです(3)

(八月三十一日付け加藤多恵宛)

草の中に寝ころびながら、アベラアルとエロイーズの手紙(4)を読んだ。妻たらんよりは恋人たらんことを欲して(すでにアベラアルの嵐を宿しながら)アベラアルの求婚をも斥けたエロイーズの気持など、それも一時ですぐ男の言ふなりになつてゆく気持も面白い。(略)——そんな殊勝なエロイーズだとか、いつか君にも読ませた「ぼるとがる文」(5)のはげしい気持の作者だとか、さういつた僕の快心の女性にちかい女のひとを、古い日本の時代に架空して、そんな女性の残した日記みたいなものを、今度僕は発奮して書いてみたいんだ。

ここから、リルケの愛したといわれる「アベラアルとエロイーズの書簡」や「ぼるとがる文」に登場する女を日本の王朝文学

に置き換えようという堀の構想が読み取れる。当初は「古い日本の時代に架空して」創作するつもりだったことが伺える。九月に入ると作品が『蜻蛉日記』に絞られてくる。

(九月十二日付け佐藤恒子宛)

一週間ばかり閉じ籠もつて「蜻蛉日記」といふ古い日本の女のひとの書いた日記を読み続けてゐました ちよつと「ぼるとがる文」にも共通する 女性のきびしい気持ち(男に対する)がとてもいい——さういふものを今度ねらつて、書きたいと思つてゐます

(九月十五日付け神西清宛)

ジョーザ・ムアの「エロイーズとアベラール」といふ小説、ああいつた行き方で、今度は僕「蜻蛉日記」を自分のものにして書き直さうと企ててゐる

(九月二十一日付け佐藤恒子宛)

内容は前に「物語の女」でやつたやうな中年の貴婦人の日記——しかし今度は所謂矜高き女性なるものを出来るだけ不幸な不幸な目に遇はせてやりたいものです しかもその原因といふのが移り気の多いつれない夫に真面目な深い愛を求めたがためなのです 日本の女の書いた一番最初の古い日記である「蜻蛉日記」といふのがさういふ主題を自らもつてゐるのです

書簡からは、堀が西欧文学の中の恋する女の姿に通じるものを、『蜻蛉日記』の女に見出していたことがわかる。佐藤恒子には「そんな古いものを出来るだけ operation などを加へずにそのまま使用して」(九月二十一日付け書簡)現代に蘇らせた

いという堀の意図も語っている。これらの書簡の内容は、のちに「七つの手紙 或女友達に」（『新潮』昭和十三年八月、原題は「山村雜記」）として整理され、単行本『かげろふの日記』の序として所収される。

こんどの仕事には、（アペラールとエロイーズのような）（引用者注）さういふ手紙や日記を残していた昔の不幸な恋人たちの一人を取り上げて見たいのです。さう、まあ王朝時代のものなら申分ありませんが（略）それを私がちょっと換骨奪胎しただけでそのまま私の好みの物語になつて呉れるやうなものがありませんか知らん？（『七つの手紙（二）』）

『蜻蛉日記』といふのは、あの「ぼるとがる文」などで我々を打つものに似たものさへ持つてゐる所の、——いはば、それが恋する女たちの永遠の姿でもあるかのやうに——愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつけ、その求むべからざるを身にしみて知るに及んではせて自分がそのためにこれほど苦しめられたといふ事だけでも男に分からせやうとし、それにも遂に絶望して、自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求めに至る不幸な女の日記です。（『七つの手紙（二）』）

堀は、王朝時代の日記や家集の中に、「換骨奪胎」して「私の好みの物語になつて呉れるやうなもの」を探し、「女として苦しい思ひのありつたけをした」「不幸な女の日記」である『蜻蛉日記』にたどり着いたのである。そして、『蜻蛉日記』の女

の苦悩する姿に、「エロイーズ」の純粹に愛する姿や、愛の苦悩を訴える「ぼるとがる文」の作者の激しい気性に通じるものがあることを感じ取っている。数ある王朝文学の中で、愛に生きる純粹さ（エロイーズ的愛）と、愛の苦悩を訴える激しさ（『ぼるとがる文』の作者的愛）を併せ持つ女性が『蜻蛉日記』の女主人公藤原道綱母だったと考えられる。これが『蜻蛉日記』を素材に選んだ一つ目の理由である。

二つ目の理由は、『蜻蛉日記』下巻にある右馬頭遠度の養女への求婚譚に、「物語の女」の母と娘と森於兎彦のモチーフに通じるものを感じとつたからではないかと考える。前述したように、「風立ちぬ」や「かげろふの日記」を執筆していた時期、堀は「物語の女」の続編の創作を模索していた。『蜻蛉日記』の女主人公の複雑な心理を読み解くことによつて、堀は「物語の女」続編への助走としたかったのではないだろうか。このことについては「ほととぎす」論を新たに起こして考察したい。三つめの理由は、「姥捨記」（『文学界』昭和十六年八月号）の次の文から推測できる。

決して世間並みに仕合せではなかつたその淋しさうな（『更級日記』の）（引用者注 作者すらも何んとなく仕合せに見え、本当にかはいさうなのは矢つ張「かげろふ」の作者であるやうな気がした。さうしてそのとき私が一つの試練でもあるかのやうに自分をその前に立ち続けさせてゐたのは、その何処までも詮め切れずにゐるやうな、一番かはいさうな女であつたのだ。

堀にとって『更級日記』の女は「何んとなく仕合せ」で、「本

当にかはいさう」なのは、永遠の愛を求めてもがき苦しむ『蜻蛉日記』の女だった。その女に寄り添うことが、創作に行き詰まっていた堀が最初に取り組むべき課題だった。こうして『蜻蛉日記』が小説の素材として最初に選ばれたのではないかと考へる。

では、『蜻蛉日記』をどのように「換骨奪胎」させたのか次章で述べてみたい。

2 『蜻蛉日記』上巻との比較

「かげろふの日記」は、(その一)から(その八)まで計八章からなる中編小説で、『蜻蛉日記』上巻と中巻の内容を素材としている。本章では『蜻蛉日記』上巻の内容と「かげろふの日記」を比較する。

『蜻蛉日記』は、天暦八年(九五四年)から天延二年(九七四年)までの二十一年間に及ぶ道綱母と藤原兼家との結婚生活や、身辺の出来事を描いている。兼家からの求婚、結婚、道綱出産、多情な夫への不信や不満、そして破婚を迎えるまでの女主人公の苦悩を克明に記した王朝女流日記文学の最初の作品である。平安時代の女性が自分の人生と向き合い、自我を封印せず、逆に、それを世間に問おうとした強い意志が感じられる。

上巻は、天暦八年から安和元年(九六八年)までの十五年間の日記であり、「かくありし時過ぎて、世の中にいとものはなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり」という序文に始まり、「なほものはかなきを思へば、あるかなきかのこちするかげろふの日記というべし」という結文で閉じられる。

相聞歌や周辺の人々との贈答歌が時の流れに沿って配列され、歌物語的な構成となっている。不安に暮れる兼家との結婚生活を語る道綱母の「身の上」の記録であり、序文と結文に共通する「ものはかなし」(どことなく頼りない、はかない)という言葉で枠組みされた日記と言える。堀は上巻の結文を「かげろふの日記」のエピグラフに据え、題名もここから取っている。ここで、伊牟田経久の『蜻蛉日記』上巻の構成表(6)を参考に、八段落に分けて上巻の内容を概観してみたい。

(1) 序文、兼家との結婚

兼家の求婚から結婚、父倫寧の陸奥への旅立ち、道綱出産などを描く。

(2) 町の小路の女

町の小路の女の出現と出産に悩む道綱母の姿や、桃の節句を過ぎて姉が夫に付いて転居していく寂しさを描く。兼家妻の時姫を見舞い、贈答歌を交わす。町の小路の女が兼家の寵愛を失うことを喜ぶ道綱母。兼家との贈答歌(長歌)などで待つ身の辛さを訴える。

(3) 兵部卿の宮

兵部卿の宮と贈答歌を交換。宮より薄を賜り語り合う。

(4) 母の死

母の死で極度の失意に陥る。一周忌祓を兼家が執り行ってくれるか不安に陥る。叔母と悲しみを共有する。

(5) 兼家発病

兼家は道綱母の家で発病し自宅へ戻る。兼家に乞われて道綱母は兼家邸を訪れ、夫と一夜を過ごす。祭り見物や

五月の節会など季節の風物が記される。

〈6〉はかなき身を嘆く

ゆすぶ

泪坏の水がそのままになっているのを見て、兼家の訪れが遠のいていることを嘆く。稲荷詣で、賀茂詣でなど神仏に祈念して心を慰めようとする。

〈7〉村上帝崩御、登子を見舞う

村上帝崩御後、佐理の出家を思い、登子に歌を贈る。

〈8〉初瀬詣で

初瀬詣でに出かける。宇治で兼家一行が道綱母を出迎え、忘れたい思い出となる。御祓、大嘗会などを行い、年の暮れを迎える。結び

『蜻蛉日記』上巻の道綱母は、不実な夫に苦しみ、町の小路の女に対する嫉妬を露わにする。また、夫が訪ねてきても口も利かなかったり、黙って参籠したりする。「憎悪嫉妬昂奮依怙地等々の自画像」(7)という評価があてはまる一方、「妻という立場で制度に従い、受け身に生きるしかない中で、制度を越えた人生を模索する」(8)女という見方もある。

『蜻蛉日記』上巻の内容は「かげろふの日記」の(その一)と(その二)の章に生かされている。(その一)では、序文に始まり、兼家との結婚、道綱出産などの出来事が『蜻蛉日記』上巻の構成にしているが、殆ど原作どおりに再現されている。(その二)には、「泪坏の水」の挿話と、「町の小路の女」の男子出産、その女が兼家の寵愛を失う出来事が描かれている。

堀の取捨選択はどの視点から行われたのだろうか。そのキーワードが、『蜻蛉日記』上巻を枠組みする「ものはかなし」と

いう言葉ではないかと推測する。結婚生活に安住できない女主人公の「ものはかなし」を強調することが、堀の創作のポイントとなっているのではないだろうか。

この「ものはかなし」を念頭に置き、『蜻蛉日記』上巻から削除された部分と、そのまま生かされた部分、堀による創作部分の三つの部分から、「かげろふの日記」における堀の「換骨奪胎」について考察してみたい。

まず、『蜻蛉日記』にある多くの和歌は削除された。「かげろふの日記」が小説であることを考えればやむを得ない。しかし、「わが頼もしき人」と道綱母が上巻で述べている父親倫寧が、陸奥守として東北へ出立するエピソードと、父が兼家に宛てた「君をのみたのむ旅なる心には行末とほく思ほゆるかな」という和歌は採用された。これを読んだ兼家が道綱母を力づけようとしたことも『蜻蛉日記』の内容に準じて表現している。最も頼りにしていた父との別れは、結婚からまだ日が浅く、夫に頼りきれない状態にある道綱母を不安にさせる出来事だった。

また、「町の小路の女」の出現によって夫の夜離れが進み、苦悩を募らせる道綱母が詠んだ「歎きつつひとりぬる夜の明くるまはいかにひさしきものとかは知る」という和歌も小説に挿入されている。百人一首にも採用されたこの一首は、不幸な生活とそれに起因する不満や苦悩を印象づける効果があり、王朝文学の雰囲気을漂わせている。

母の死に嘆き悲しむ道綱母の姿は、「かげろふの日記」では省かれるが、道綱母の姉が、通ってくる男に導かれて屋敷から去っていく出来事は書かれている。道綱母は頼りにしていた姉

も失い、悲しみを深めていく。

つづく「兼家発病」と「兼家邸訪問」、「初瀬詣で」と「兼家の迎え」の場面は「かげろふの日記」にはない。この二つのエピソードは、道綱母が兼家とともに過ごし、妻としての喜びやプライドが保たれる場面である。堀は、女主人公が夫や周囲から妻として認められ、プライドを回復する場面は削除している。つまり、『蜻蛉日記』にある道綱母の苦悩する姿を生かして「かげろふの日記」は再構成されたといえるだろう。

では、堀はどのような創作を施しているのだろうか。女主人公の心理を表現している（その一）の、次の一文を見てみよう。かうしてお離れになればなるほど、あの方についていままで覚えのなかつた位にお慕わしさのつづて来る自分ება、どうしやうもなくてゐた。

「かげろふの日記」の女主人公は、訪れない夫を恨んでい一方、今まで以上に夫を慕わしく思ってしまう。このように矛盾する切ない思いが彼女の内面にある。兼家の乗った車が彼女の家の前を素通りしていく場面でも、彼女の思いは複雑である。「なんとかしてあれだけは聞かずにゐたいものだ」と思う一方で、思いとは裏腹に女主人公は耳をそばだてる。

一方では、いましがた私の家の前を咳をなさりながらお通りすぎになつたあの方が、だんだんその咳と共に遠のいて往かれるのを、何処までも追ふやうにして、私は我知らず耳を側立ててゐるのだつた。

夫を乗せた車の音を聞きたくない思いは、家の前を素通りされる悔しさと惨めさを味わうからである。それにもかかわらず、

女主人公は車が遠のいていく音を「何処までも追」つてしまう。ここにも苦悩の原因である夫を慕い続けてしまう道綱母の切ない女心を見ることができる。堀は『蜻蛉日記』に書かれていない女主人公の心理を「かげろふの日記」に書き加え、他者に頼らないではいられない女主人公の「ものはなかさ」を前景化させているのである。

女主人公と関係性の弱い人々との交流や、女主人公のプライドが保たれる場面は省かれ、彼女の不安や苦悩の原因となる不幸な出来事は、『蜻蛉日記』の内容が生かされた。さらに、頼りにならない不実な夫を慕い続けてしまう女主人公の切ない女心を新たに書き加えることによって、彼女の苦悩する姿が一層強調されることになった。堀は、『蜻蛉日記』上巻を枠組みする「ものはなかし」をモチーフに「かげろふの日記」（その一）と（その二）を創作したと考えられるのである。

3 『蜻蛉日記』中巻との比較

では、『蜻蛉日記』中巻は「かげろふの日記」にどのように反映しているのだろうか。「かげろふの日記」（その二）から最終章（その八）と、『蜻蛉日記』中巻は、一見ほとんど違いがないように見える。船橋は、「成功とは申しがたい（略）もつと原文をはなれて、堀君の創作にして欲しかつた。」（9）と述べている。このように、「かげろふの日記」は発表当時から『蜻蛉日記』の原文に忠実すぎるといふ評価が下されていた。

しかし、「かげろふの日記」には、『蜻蛉日記』の内容を越えて、苦悩から自立していく女性を描いた堀のオリジナリティが

感じられる。なぜなら、『蜻蛉日記』の作者道綱母は人生を諦観するに至るが、不幸な結婚に対する苦悩からは逃れられないのに対し、「かげろふの日記」の女主人公は、「自分を苦しめた男をいまは反つて見下ろしてゐられるやうな、高揚した心の状態」(10)をもつ女性へと成長していくからである。

「あるかなきか」の心細い心境で生きてきた女主人公は、堀によつて、苦しみさえも命の糧として受け入れていく生き方を獲得していく。西欧文学にある「恋する女の永遠の姿」を王朝日記文学に認めた堀は、苦悩と孤独の底からしたたかに這い上がつていく女の物語として、『蜻蛉日記』を「換骨奪胎」し、「かげろふの日記」を創作したのではないだろうか。

『蜻蛉日記』中巻には、上巻に続く、安和二年(九六九年)元旦から天禄二年(九七一年)の年末まで、道綱母三十四歳から三十六歳までの三年間の生活や身辺雑記が記されている。

ここで、小学館『新編日本古典文学全集13』の段落構成と小見出しを参考に、『蜻蛉日記』中巻の内容を概観してみたい。

〈一〉新年にあたり、「三十日三十夜はわがもとに」という年賀の寿歌を詠むが、夫兼家の訪れはない。

〈二〉三月三日桃の節句に、道綱母の侍女と兼家の侍とがたわむれに歌を交わす。

〈三〉安和の変による左大臣藤原高明の流謫に同情する。

〈四〉病となった心細さから息子の行く末を案じ、兼家に宛てて遺書をしたためる。

〈五〉愛宮(前左大臣高明室)に長歌を贈り慰める。

〈六〉小一条の左大臣五十の賀の屏風歌二首採用される。

〈七〉内裏の賭弓での息子道綱の活躍に安堵と喜びを感じる。

〈八〉兼家の来ぬ夜が三十余日、昼が四十余日となり、夫の急変に、対処するすべもなく苦悩する。

〈九〉心の置き所ないまま、唐崎(琵琶湖の西浜にある崎)に祓に行き、自然の風景に心が解放される。

〈十〉貞観殿の御方(兼家の妹・登子)との和歌の交流に慰められるが、夫への不満が募り、尼になつて執着を断ち切ろうと道綱に告げる。すると、「私も法師になる」と言つて道綱は飼つていた鷹を放つてしまう。

〈十一〉近江という女 の 存在を知り、決心して石山詣でに出る。自然や風物に慰藉を受ける。

〈十二〉道綱の元服をめぐる夫婦の交流や、権勢を誇る夫への憧憬と同時に、夫との隔たりを悲しむ。身辺の雑事をしつつ、自己を振り返る。

〈十三〉兼家と近江の関係が進み、門前を素通りされる。

〈十四〉人からもらつた呉竹を庭に植える。有終の極みに達し、道綱を伴い父の家で長精進を行う。

〈十五〉兼家の前渡しせぬ世にと、鳴滝へ立つ。

〈十六〉鳴滝般若寺に到着後、兼家が追つてくる。道綱が取りつぎ役をするが、道綱母の決意は固い。

〈十七〉閑静な山寺で心穏やかに精進しながら尼にでもなろうと道綱にこぼす。叔母や妹が慰めに訪れる。

〈十八〉兼家の使者が下山を勧めに来る。

〈十九〉京に帰した道綱が、雨中、夫からの文を持つて戻ってくる。

〔二十〕親族たちが見舞いに来る。

〔二十一〕兼家の長男道隆が来訪し、下山を勧める。

〔二十二〕父倫寧からも下山を勧める文が届く。兼家によって

強引に京へ連れ戻される。

〔二十三〕帰宅後、磊落な兼家の冗談を聞き流す。方角が悪く、

夜分に帰って行く兼家を見送る。結局、夫婦間の溝

は埋まらない。

〔二十四〕またも兼家の訪れが途絶えがちな生活

〔二十五〕父倫寧に伴って再度初瀬詣でに出かけ、兼家が迎え

に来てくれた昔を懐かしむ。

〔二十六〕しめやかな人生観照

以上のように、『蜻蛉日記』中巻には、上巻の不安定な夫婦関係が進行し、夜離れの続く夫を待つ身の辛さを耐えしのび、病によっていつそう心細さを増す女主人公の姿が描かれる。上巻と異なるのは、道綱母が唐崎祓い、石山詣で、鳴滝般若寺への山籠もり、初瀬詣でなど、慰藉を求めてたびたび参詣に出かけることである。その道中で出会う人々や自然の情景に心を動かされて、一時、執着から解放される。この参詣に伴う情景描写が中巻では多くなる一方、上巻に比べて和歌の数は少なくなる。自然描写が増えていき、散文が多くなるのが中巻の特徴と言える。

では、堀の「かげろふの日記」は『蜻蛉日記』中巻をどのように反映させているのだろうか。まず、中巻から削除された部分について見てみたい。

『蜻蛉日記』にある章で削除されたのは、見出し〔一〕〔二〕〔三〕

〔五〕〔六〕〔十一〕〔十八〕〔二十五〕〔二十六〕である。

削除部分の内容をまとめると次の二点に絞られる。

① 道綱母との関係性が強い人物が描かれている部分

② 唐崎祓え、石山詣で、父の家での長精進、再度の初瀬詣

で

①は、『蜻蛉日記』上巻を反映させた「かげろふの日記」（その一）（その二）にも見られたように、作中人物を絞ることで、女主人公である道綱母と夫兼家、子道綱との関係をより凝縮させる効果があると考えられる。

②は、女主人公が苦悩から逃れるために参詣を繰り返す部分である。堀はこの大部分を削除し、鳴滝山籠りの部分だけを残した。鳴滝から下山したあと、女主人公の心情は、苦悩から諦観へと変化する。多くの精進の中で、女主人公に与えた影響がもっとも大きかったのが鳴滝山籠りだと考えられる。そのため、鳴滝山籠りだけが「かげろふの日記」に選ばれ、この場面をもとにして、堀は『蜻蛉日記』の道綱母とは別の生き方をつかんだ「かげろふの日記」の女主人公を創作したと筆者は考える。

鳴滝山籠りは「かげろふの日記」の女主人公の生き方をどのように変化させたのだろうか。

堀は、「かげろふの日記」（その四）後半から（その六）までをこの鳴滝山籠りにあてた。（その四）で、女主人公は「こんな私なんぞは、いつその事これつきり何処かへひそかに身を引いてしまつた方がいいのではないかしら。」と、尼になる覚悟を持って西山の鳴滝般若寺に籠る決心をする。夫や夫の使者などが次々とやって来ては道綱母に下山を勧める。道綱母は頑と

して帰らない。この様子は『蜻蛉日記』中巻に準じて描かれている。頑なに山籠りを続けていた女主人公が、突然雷に見舞われるシーンを『蜻蛉日記』の表現と比べてみよう。

時しもあれ、雨いたく降り、神いといたく鳴るを、胸塞がりて嘆く。(『蜻蛉日記』中巻)

『蜻蛉日記』の道綱母は、雷の恐怖におびえる弱い存在である。しかし、「かげろふの日記」では、女主人公の心理がこの場面を境に変化していく。その変化を(その五)にある次の文章で確認してみたい。

① いつその儘、かうして自分が死にでもしたら、せめてはそんな痛ましい最後がをりをりあの方に自分の事を思ひ出させ、そのお心を充たしてくれるかも知れない。

② この間と丁度同じやうな時刻になると、突然夕立が来た。(略)しかし、私は今度は簾も下ろさずに横なぐりの雨に打たれながら大木が苦しみもだえるやうな身ぶりをしているのを、ときどき顔をもたげては、こはごはちつと見入つてゐた。さうして私は自分が本当に苦しむことを好んでゐるのだつたら、こんなに何もこはがりはいらないだらうにと思ひかへしながら、だんだん長いことそれを見つめてゐた。

③ いつか知らず識らずの裡に自分自身をその稲光りがさつと浴びせるがままに任せ出してゐた。恰もさうやつて我慢をしてゐる事だけが自分のもう唯一の生き甲斐でもあるかのやうに。

女主人公は、初めは①にあるように、自分が死んだらその最

後を夫が思い出してくれるだろうかと思ましく考えている。しかし、②では、もし自分が苦しむことを好んでいるのならにも怖がることはないと敢えて雷を見つめ出すように挑戦的になつていく。さらに③では、稲光を怖がりもせず、かえつて我慢することが生き甲斐だと考えるようになる。恐怖や苦悩を自らの喜びとし、我慢することさえ生き甲斐として受け止めようとする態度を「かげろふの日記」の女主人公は獲得しつつある。この出来事のあと、女主人公は山籠もりから夫によつて強引に連れ戻される。豪放磊落な兼家は冗談など言いながら道綱母を連れて帰つて来るが、方角がふさがっていることを知ると、「方あきなばこそまゐり来べかなれ」などと言つて帰つてしまふ。堀はこの場面の道綱母の心情を(その六)で次のように表現した。

生憎な物忌のために、しばらく私からお遠のきになつて入らつしやる間に、又昔のやうにつれなくおなりになられさうな事ぐらゐは、私にもよく分かつてゐた。しかし、私には、それをそのままに任せて置くよりしかたがないのだつた。

鳴滝山籠りが「心境的には一つの転機」になつたとする国文学研究の立場からの指摘がある(11)。一方、「かげろふの日記」研究の立場から、村橋が「下山後の女主人公の心には大きな変化」が生じ、「その変化を彼女は自覚している。」(12)と述べているのは興味深い。道綱母が人生に諦めを感じる点では、『蜻蛉日記』と変わらない。しかし、「かげろふの日記」の女主人公は、そういう変化が自分の内面に起こっていることに気づいている。その根拠となるのが以下に示す「かげろふの日記」(そ

の七)の文章である。

矢つ張自分の思つたとほり、少しはお心が変られるのか
なと考へたのはあの時の私の考へ過して、あの方は相変
らず以前のあの方だけだつたのらしい。さうして私だけ
が——さう、私は少くとも、あの山から帰つて来てからは、
もう昔のやうな私ではなくりかけてゐるのだ。

この変化を、兼家の異母妹である登子への文の中で、女主人
公は自ら次のように分析する。

苦しい思ひも、みんなあの方が私にお與へ下さるものと
もへば反つていとして、或時などは自分から好んでそれ
を求めたほどございました。(略)そんな苦しみが無け
ればないで、反つて一層はかなく、殆どわが身があるかな
いかなつてしまひはせぬかと思はれる程なのでございま
すから。

彼女は、「苦しみ」があることによつて、「わが身があるかな
いか」の状態から救出されていると自覺しているのである。『蜻
蛉日記』の道綱母が、山から下りても嘆き悲しむ状態から脱し
きれないのに対し、「かげろふの日記」の女主人公は、明らか
に前向きな人生へ向かおうとしている。

私にとつては命の糧にも等しいほどな、その苦しみのお値
打ちにも、それを私にお與へ下さつてゐるご当人は少しも
お気づきになつて入らつしやいませんやうなのでも。私
はそれをば此頃あの方のために何だかお気の毒に思つて
をります位。

このように苦しみさえも生きる糧とし、逆にその苦しみを与

えてくれる夫がそれに気づかないのを気の毒に思つてい
るのである。そして、女主人公は次の結論に至る。

私はもう昔みたいにあの方のためになんぞ苦しむまいとは
思はないが好いのだ。いくらあの方からお離れしようとも、
もう自分がお離れできない事はよく私にも分かつてゐる筈
だらうから。

夫から離れられない自分を自覺した女主人公は、苦しみから
逃れない生き方を選んでいく。

さらに、「かげろふの日記」終章(その八)には、夫への執
着を乗り越えた女主人公の態度がより明確に描かれている。

あの方のお心の中がすっかり見え透いてでもあるかのやう
に、あんまり言ひわけがましく仰やるのを反つてをかしい
位に思ひながら、あの方をいかにも何気なさうにおもてな
しをしてゐた。そんな自分を自分でもずゐぶん昔とは変つ
たなと思つてゐたが、流石にあの方でもさう云つた今の私が
まるで別人のやうにお見えになるらしく、それが何時も屈
託なささうにして入らつしやるあの方までを、いくらか不
安におさせしてゐるらしかつた。

突然来訪した夫を、女主人公は落ち着いた態度で出迎える。
すべてを受け入れるその態度に、反つて夫が不安がる場面だ。
ここで夫婦の立場は逆転する。

この後、兼家が父倫寧の家に移り住んでいた道綱母を訪ね、
そばにあつた香や数珠を投げ散らかして苛立ちを露わにする場
面がある。「身じろぎもせず、どんな事をなされやうともぢ
つところへながらあの方のなさるがままにさせて」いたとある

ように、「かげろふの日記」の女主人公は、狼狽することなく夫の狼藉を傍観している。そんな彼女の目には、「乱暴な事をなさりながら、反つてあの方が私にお苦しめられてゐる」ように映る。そして、兼家がそれには「一向お気づきなされやうともせずに入らつしやる」のが「私には分かつて来た」と、夫を冷静に分析する。そして、「私のためにお苦しめになつたなんぞと云ふ事をあの方にはお分かりにならせぬのが、せめて私の思ひやりでもある」と無理解な夫をそのまま受け入れ、情けまをかけている。以前の女主人公なら、夫に苦しめられていることを夫に分からせようとしたり、自分が死んだら夫は思ひ出してくれるだろうかと気弱に考えたりしていたにちがいない。

結婚生活に不満や不安を抱き、苦しんだ末に「かげろふの日記」の女主人公がたどり着いたのは、苦しみから逃れようとするのではなく、苦しみがあるがままに受け止め、それを「命の糧」として生きる生き方であつたと考えられる。堀は諦観に至つた女主人公を諦観に留めず、相手より優位に立たせ、すべてを受け入れる積極的な生き方を彼女に獲得させたのである。

「七つの手紙 或女友達に」の中で、堀は「自分を苦しめた男をいまは反つて見下ろしてゐられるやうな、高揚した心状態を、私がその苦しい女主人公のために最後に見つけてやつた事は、この作品を私のものとして世に問ふ唯一の口実ともなりませう」(13)と述べている。「エロイズ」的純粹さと、「ぼるとがる文」的な激しさの両面を『蜻蛉日記』の女に見出した堀は、「かげろふの日記」で、苦しみも悲しみもあるがままに

受け止め、それを命の糧として苦悩から立ち上がつて生きていく女の物語に作り変えたのである。

おわりに

王朝時代の女性たちが主体的に生きるようとすることはひじょうに困難だつたと思われる。その中で、道綱母は不実な夫との結婚から逃れようともがくが、結局どうすることもできず、諦観の中に生きることになる。堀は、他者からは理解されない『蜻蛉日記』の女主人公の不安や悲しみ、そして恨んでもなお夫を慕つてしまふ女の悲しい宿命を読み取り、その内面の心理に寄り添つて現代に再現した。「ものはかなし」をキーワードとしてスタートした「かげろふの日記」は、不幸な結婚生活を送る女主人公が、自我の在り方を問い続け、苦悩の末に孤独から立ち上がつて運命に立ち向かつていく新たな女の物語として完成したのである。日本の古典を「換骨奪胎」させて小説を創造したいという堀の創作意図は、このような形で「かげろふの日記」において達成されていると思われる。

「かげろふの日記」執筆後ほどなく、堀は書きあぐねていた『風立ちぬ』終章「死のかげの谷」を完成させる。「かげろふの日記」は、堀の創作意欲を再燃させた作品ということもできるだろう。堀の王朝文学への関心はこの後も続き、『蜻蛉日記』下巻をもとにした「ほととぎす」を昭和十四年『文藝春秋』二月号に発表する。今後は「ほととぎす」に見られる『蜻蛉日記』下巻の影響について検証していきたい。

- (1) 池内輝雄編『堀辰雄』《鑑賞日本現代文学第18巻》角川書店 昭和五十六年十一月、一七五頁
- (2) 小谷恒一『堀辰雄と折口信夫―私記風に見た堀辰雄の一面―』《堀辰雄》日本文学研究資料叢書 有精堂 昭和四十六年八月、二七七頁 小谷は「大森の室生犀星先生の家で私が初めて堀さんに会ったのは昭和十一年」で、このころ「かげろふの日記（前篇）」の準備に入っていたと書いている。
- (3) 引用した佐藤恒子、神西清に宛てた書簡には句点が付されていない。
- (4) 十二世紀ごろのフランスの論理学者であり、キリスト教神学者のアベラールと、その愛人で修道女のエロイズとの間に交わされた書簡集。リルケの愛読書だったと言われる。エロイズには愛の純粹化を願う「殊勝なエロイズ」のイメージがある。
- (5) 十七世紀、ポルトガルの修道女マリアンナ・アルコフォラードが、自分を捨ててフランスに帰国したシャシリイ侯爵にあてた書簡集。現在ではフランスのギュラーグ伯による創作と考えられている。リルケによる独訳で知られる。作者マリアンナには、自分を捨てた不実な男に愛の苦悩を訴える激しい気持ちの持ち主というイメージがある。
- (6) 『蜻蛉日記』上巻の表現と構成」『平安朝日記Ⅰ』日本文学研究資料叢書 有精堂 昭和四十六年三月、二三四

- (7) 今井源衛「右大将道綱の母」《河出書房『日本文学講座Ⅱ』、野村精一「かげろふの終焉」注6書所収、一二二頁より引用
- (8) 木村正中『土佐日記・蜻蛉日記』新編日本古典文学全集 13 小学館 平成七年十月、四二五頁
- (9) 船橋聖一「文芸時評」《『解釈と鑑賞』昭和十三年一月号、村橋春洋「かげろふの日記」論『解釈と鑑賞』平成八年九月、九九頁より引用
- (10) 「七つの手紙 或女友達に」《角川出版『堀辰雄全集』第5巻、一八七頁
- (11) 木村正中『蜻蛉日記』解説（注8書、四一三頁）
- (12) 村橋春洋「かげろふの日記」論（注9書所収、一〇二頁）
- (13) （注10と同じ）（平成元年度修了生）